

西村嘉兵衛作蓮華寺燈籠の形態的特徴と西江州蓮華寺燈籠の変化に関する考察

A study on morphological characteristics of Nishimura Kahei's Rengeji Lanterns and its changes in Nishigoshu Rengeji Lanterns

落合 知帆* 楊 書偉**

Chiho OCHIAI Shuwei YANG

Abstract: Stone lanterns were introduced to Japan along with Buddhism and began to be installed in temples first; then, it was incorporated into tea gardens and gardens of ordinary households since the early modern period. This study, with the comparison among Rengeji lanterns made in Nishigoshu (Minamikomatsu district, Otsu City, Shiga Prefecture) centering Kahei Nishimura's work and other regions to clarify the characteristics of the Nishigoshu Rengeji Lanterns. The purpose is to capture the morphological changes of the Rengeji lanterns, focusing on the work of Kahei Nishimura, who was called a master craftsman. As a result, the characteristics of the Kahei Nishimura and also Nishigoshu Rengeji Lantern have seven parts, and each part has a highly unique shape and pattern. Also, its elaborate carving and several details showed a high degree of decorativeness and originality of the Nishigoshu Rengeji Lanterns. In addition, as a result of examining the stages in which the form of the Nishigoshu Rengeji Lantern was fixed to its current form, it can be said that the form of the lantern changed from linear to curved and from simple to complex.

Keywords: Stone lantern, garden stone lantern, Japanese house garden, Rengeji lantern

キーワード: 石燈籠, 庭燈籠, 民家の庭, 蓮華寺燈籠

1. はじめに

石燈籠（以後、燈籠と記す）は仏教とともに日本に伝来し社寺に設けられた。室町時代末期からは茶庭に取り入れられ、近世以降には一般家庭の庭園に設けられるようになったといわれている^{1) 2)}。石造美術品の一種である燈籠は、造園、建築、景観、石造業など多くの分野で古くから研究者たちの関心を集め、昭和期には、燈籠の起源、使用目的、材料、構成要素、分類などを中心とした研究が行われてきた^{1) 2) 3) 4)}。このような体系的な研究に加え、石材業者の視点に基づき、燈籠の見取図に関する研究もある^{5) 6) 7)}。燈籠に関する研究では、社寺にある燈籠の本歌、特に江戸時代までの発展を捉えたものが主流であり、庭に据えられた燈籠は元々本歌を模倣したもののためか、あまり注目されてこなかった³⁾。

庭の燈籠に注目した研究では、上原⁴⁾が燈籠の役割に着目し、燈籠の大きさ、設置場所や位置を説明するものや、平山^{8) 9) 10)}による燈籠を主に3種類に分類したものがある。しかし、特定の種類の燈籠や石工に着目し、燈籠の地域的特徴や形態の変化に着目した研究はあまり見受けられない。燈籠は日本庭園や個人宅の庭を構成する重要な要素の一つであり¹¹⁾、その地域的特徴や変化を捉えることは、地域の石文化と石工たちの技術や工夫を理解する上で重要である。

大津市南小松地区（西江州）出身の石工である西村嘉兵衛に関しては、これまでに西村嘉兵衛の当代が保管していた大正元年から昭和35年（1912 - 1960）の情報が記載されている「石売上帳」分析から蓮華寺燈籠が最も多く製作・販売されていたこと、また、彼が作り出す燈籠は「嘉兵衛燈籠」と呼ばれ、近江商人たちがこぞって注文するほど名工として知られていたこと、当地での石材業は明治から昭和初期が全盛期であったことなどが明らかになっている¹²⁾。また、楊らの研究¹³⁾では、嘉兵衛作の蓮華寺燈籠の使用石材の色目や全体の大きさ、中台に施された文様の特徴などが明らかになっているが、各部位の形態的特徴を詳細

に把握するには至っていない。これまで、西村嘉兵衛が製作した燈籠に関する体系的な先行研究は殆ど行われておらず、使用石材や一部の形態的特徴を基に石材業者、造園業者や収集家らの口伝や目視により特定されているのが現状である。このため一部では、その使用石材や形態的な特徴が十分に理解されずに間違った嘉兵衛作燈籠の特定がなされている。

そこで本研究では、滋賀の名工と呼ばれた西村嘉兵衛作の燈籠を体系的に理解することを目的とし、まずは西村嘉兵衛作による製作・販売数が最も多い蓮華寺燈籠¹²⁾（以後、嘉兵衛蓮華寺燈籠と称す）を対象とし、1) 嘉兵衛蓮華寺燈籠と他地域作の蓮華寺燈籠を比較することで、嘉兵衛蓮華寺燈籠で使用されている石材、各部位の形や各部位の径と高さの比率といった形態的特徴を明らかにする。そして2) 製作年が古いと考えられる西江州蓮華寺燈籠2点、嘉兵衛と同世代に活躍した中野甚八作の蓮華寺燈籠1点と平均的な嘉兵衛蓮華寺燈籠1点の合計4点を比較することで西江州地域における蓮華寺燈籠の形態的变化や蓮華寺燈籠の設置場所の特徴を捉える。

西江州は燈籠の産地として知られていたが、これらの燈籠は民家の庭に設置されるためその所在や実態が十分把握されていない。また、産出地である南小松地区にこれらの燈籠がほぼ残っていないことからその検証が難しい状況がある。一方で、西村嘉兵衛作の燈籠は、西江州燈籠の代表的な作として知られ、これらを取り扱った石材業者や造園業者の記録にも残っている。このため、明治～昭和初期という石材業が最も栄えた時代に3代で活躍した嘉兵衛蓮華寺燈籠が現在では、西江州の蓮華寺燈籠の代表的な形態として地元の石工や造園業者らに認識されるに至っている。

2. 研究方法

嘉兵衛蓮華寺燈籠と他地域作の蓮華寺燈籠との比較を通じて、嘉兵衛蓮華寺燈籠の形態的特徴を分析する。まず、滋賀県東近江

*京都大学大学院地球環境学舎 **名古屋大学大学院環境学研究科

市の造園業者が執筆した滋賀の近江商人等が所有する私庭を紹介した書籍および、前出の西村家に伝わる「石材売上帳」^{12) 14)}に記載された納品先と品名を確認し、特定された嘉兵衛蓮華寺燈籠の現地調査を2020年3月から2022年11月にかけて実施した。

また、嘉兵衛蓮華寺燈籠の確定には、大津市南小松地区の石材業A氏(60代)¹⁵⁾が現地調査に同行し長年の経験を踏まえ、燈籠に使用されている石材が地域特有の花崗岩の石質であるか、特に嘉兵衛蓮華寺燈籠は嘉兵衛の山からのみ産出されたとされる赤目の細粒花崗岩が使用されているか、および燈籠の形態が地域特有の形態(例えば、火袋の起りに代表される形態等)を有する嘉兵衛作または西江州作の燈籠であるかを目視にて確認した。加えて、寸法の詳細データを巻尺等を用いて取得し、所有者(個人・石材店)への聞き取り調査を行い、燈籠の設置場所や燈籠に関する知識について確認した。本調査にて、嘉兵衛蓮華寺燈籠21本(K1-K21)(以後、K群と称す)と西江州の石材を用いた嘉兵衛と同世代に活躍した中野甚八作の蓮華寺燈籠¹⁶⁾1本および作者は不明であるが西江州の石材を用いた製作年代が古いと考えられる蓮華寺燈籠3本の計4本(以後、西江州蓮華寺燈籠と称す)(R1-R4)の合計25本の情報を収集し分析対象とした(表-1)。これまでに楊らの研究¹³⁾では、嘉兵衛蓮華寺燈籠20本を対象としてその寸法をはじめとする形態的特徴の一部の詳細が明らかにしているが、本論ではこれに加え、各部位ごとの特徴を分析するとともに、他地域の蓮華寺燈籠との比較分析を行い、嘉兵衛蓮華寺燈籠の形態的特徴を捉えた。図-1は嘉兵衛蓮華寺燈籠の事例である。

嘉兵衛蓮華寺燈籠の形態的特徴を明らかにするため、比較対象として他地域の蓮華寺燈籠を選定した。分析に使用する蓮華寺燈籠の写真の選定に当たっては、いくつかの異なる地域の燈籠を選定するよう工夫した。選定方法は、まずGoogle Imageにて「蓮華寺 燈籠」165件のヒットのうち写真掲載が38件、「蓮華寺 灯籠」283件ヒットのうち写真掲載が45件であった。ここから重複を除き、さらに「蓮華寺の蓮華寺燈籠」と「嘉兵衛の蓮華寺燈籠」を除くと33件となった。ここから写真の確認にて明らかに輸入石材の使用や近年製作されたものを除いた。そののち、蓮華寺燈籠の写真が掲載されている庭園・寺社などの公開施設や写真を掲載している石材業者と造園業者のウェブサイトを確認し、蓮華寺燈籠の設置場所、石材の産出地の記載、庭の作庭年代の記載、石燈籠の風化具合、燈籠の全体が把握できるかを確認した。さらに産地の記載が無いものや一部の確定が難しい燈籠に関しては、石材業者や造園業者に確認し、現地調査が可能なものに関しては、西江州以外の石材が使用されているかを目視調査し21件を選定した。さらに、これまでの現地調査で確認が出来ていた4点を加え、25本の蓮華寺燈籠(サンプルの収集が可能であった他地域のものを採用¹⁷⁾)(O1-O25)を選出した(表-2)。具体的には石材産業や燈籠製作が盛んまたは盛んだった京都府、滋賀県、大阪府、愛知県、石川県、香川県および茨城県と、庭園に設置されている有名な蓮華寺燈籠がある東京都から収集した。本手法を用いることで、異なる地域で製作された蓮華寺燈籠の各部位の特徴を確認し、嘉兵衛蓮華寺燈籠との形態的特徴の比較が可能となる¹⁸⁾。表-3に本調査研究の対象とした蓮華寺燈籠の調査日、調査内容・方法および調査対象の燈籠を示す。Kは嘉兵衛蓮華寺燈籠、Rは西江州蓮華寺燈籠、Oは他地域蓮華寺燈籠を示している¹⁹⁾。他地域の蓮華寺燈籠の事例は図-2である。

加えて、西江州蓮華寺燈籠の形態的变化を製作年代が異なると考えられるR1、R2、中野甚八作の蓮華寺燈籠(R3)と、明治以降に製作されたと考えられる嘉兵衛蓮華寺燈籠21本(K群)からK3を比較し、それぞれの特徴と形態の変化を把握した。K群はすべての部位は同一であるが、高さや径が多様であるため、

表-1 嘉兵衛蓮華寺燈籠と西江州蓮華寺燈籠のサンプル

	西村嘉兵衛作	西江州蓮華寺燈籠
点数	21(21)	4(4)
合計	25 (25)	

*()内は現地調査があるもの

表-2 他地域蓮華寺燈籠のサンプル

場所		文化施設	私庭	販売元
京都府	京都	1(1)	2(2)	3(3)
滋賀県	長浜		1(1)	
	東近江		1(1)	
	近江八幡			1(1)
	栗東			1(1)
大阪府	湖東		1	
	大阪			1
愛知県	名古屋	1(1)		
	岩倉地域		1	
	岡崎			6
石川県	金澤	1(1)		
	白山	1		
東京都	文京区	1(1)		
香川県	高松			1(1)
茨城県	桜川			1
点数	—	6	5	14
合計	—	25 (14)		

*()内は現地調査があるもの



図-1 西村嘉兵衛作蓮華寺燈籠



図-3 蓮華寺燈籠本歌



滋賀県長浜市 (07)



京都市左京区北白川 (01)

図-2 他地域の蓮華寺燈籠の事例

表－3 調査対象とした蓮華寺燈籠の調査内容と方法

年月日	調査内容	方法	対象地・対象
20.03	燈籠形態把握	1, 2	W・嘉兵衛蓮華寺燈籠
20.03	石材業歴史	1, 2	W・石材業経験者・地域住民
20.05	燈籠形態把握	2	KY・O1
20.07	石材加工	1	W・石材業者
21.03	燈籠形態把握	1, 2, 3	E・K2, K4, K5, K6, K9, K10, K11, K23
21.04	燈籠形態把握	1, 2, 3	E・K1, K3, K7, K8, 12, K13, K14, K15, K22
21.05	燈籠形態把握	1, 2, 3	E・K16, K17, K19 I W, K20, K24
21.06	燈籠形態把握	1, 2, 3	E・K18
21.07	燈籠形態把握	1, 2, 3	E・K3, K22, K23
21.10	燈籠形態把握	1, 2, 3	E・K25, O7, O9
21.12	燈籠形態把握	1, 2, 3	E・K21
22.08	燈籠形態把握	2	A・O13
22.09	他地域の燈籠 収集・燈籠形態把握	4	O3, O8, O11, O12, O14, O15, O16, O17, O18, O19, O20, O22, O25
22.12	燈籠形態把握	1, 2	KY・O2, O4, O5, O6
23.01	燈籠形態把握	2	KA・O24
23.03	燈籠形態把握	2	E・O10
23.04	燈籠形態把握	2	I・O21
23.05	燈籠形態把握	2	T・O23

方法：1：聞き取り調査，2：目視調査，3：実測調査，4：Web 調査

対象地：W：滋賀湖西地域，E：滋賀湖東地域，KY：京都，A：愛知

KA：香川，I：石川，T：東京

もっとも平均的な数値を有する K3 を抽出した。また，それぞれの特徴と実測調査によって収集したデータに基づいて，AutoCAD を用いて各燈籠の詳細図面を作成し，燈籠の 1) 形態，2) 寸法と比率，および 3) 彫刻された文様を比較した。さらに，私庭における蓮華寺燈籠の位置とその役割の変化を考察した。

3. 嘉兵衛蓮華寺燈籠の形態的特徴

本節では，蓮華寺燈籠の概要を述べたのち，嘉兵衛蓮華寺燈籠と他地域の蓮華寺燈籠を比較した結果から嘉兵衛蓮華寺燈籠の特徴を述べる。

(1) 蓮華寺燈籠

蓮華寺燈籠の本歌は，京都市上高野の蓮華寺の本堂前に左右一対になり設置されたものであるとされている^{1) 3)}。蓮華寺燈籠は六角形燈籠の一種で，蕨手が無く，基礎反花の蓮弁が線だけで表現されていることから基本型変化燈籠³⁾または竿立燈籠⁸⁾と分類されている。本歌の全体は江戸時代のものであるが，笠，火袋，中台以外の部分は後補といわれている。例えば，現在の竿は節付きのものだが，古い竿は四角孔があけてあり，宝珠もいまの形ではなく円錐形であったとされている¹⁾。最も特徴的なのは唐傘をすばめたような形で背が高く，川勝は「隅の降棟の先端には蓮華紋をつけ，その間の屋根には瓦葺を現す段を九つ作り，下端には地杵を略式に，飛簷杵を疎杵にして一本宛刻み，隅木も作っている」³⁾とし，手の込んだ変わったものであると評している。また，燈籠の研究で知られる天沼は，蓮華寺燈籠は独特の形で，庭園作りに人気があるとしている¹⁾。この蓮華寺燈籠によく似ていることから本歌の写しと考えられているものに青蓮院蓮華寺型石燈籠（京都市東山区栗田口三条坊町）⁶⁾，妙心寺蓮華寺型石燈籠（京都市右京区花園妙心寺町）や二尊院蓮華寺型石燈籠（京都市右京区嵯峨）がある²⁾。図－3 は蓮華寺燈籠の本歌である。

本歌と嘉兵衛蓮華寺燈籠の比較において最も特徴的な点は部位の数および笠，火袋，中台の花卉，竿と，竿と基礎の接合部にある蓮弁の形状である。以下の（3）にて，他地域の蓮華寺燈籠の比較に加えて，本歌との違いを示す。

(2) 西江州石燈籠，嘉兵衛の燈籠と嘉兵衛蓮華寺燈籠

滋賀県大津市の比良山麓地域では花崗岩が産出され，江戸時代から昭和 20 年代頃までは盛んに琵琶湖を通じて近江地方に広く運ばれ販売されていた^{12) 20)}。特に南小松地区（旧志賀町南小松）では，産出される花崗岩を用いて燈籠製作が盛んに行われていたことが知られている²¹⁾。昭和 30 年代（1955－1964）には，志賀町のほとんどの家が石工関係の仕事に従事し²²⁾，その石工技術は現在にも受け継がれている²⁰⁾。1984 年には，「江州石燈籠」が滋賀県の伝統工芸品に認定されている²³⁾。

南小松地区出身の名工として知られる西村嘉兵衛（以下，嘉兵衛）は三代にかけて明治から昭和初期に活躍し，持山から産出される独特の赤石をもとに，優れた職人技で作られた燈籠は「嘉兵衛燈籠」として知られている。造園業者や石材業者などから高い評価を得ていた嘉兵衛燈籠は，東近江，彦根，長浜などの湖東地域に船で運ばれ，近江商人たちの庭を中心に多くの私邸に設置された¹³⁾。現地で 2020 年から 2022 年にかけて実施した西村家当主，石材業関係者およびかつて石材業に従事していた地域住民への聞き取り調査によると，西村嘉兵衛は南小松地区の燈籠製作において中心的な役割を担い，多くの職人を抱えていた。その名声は滋賀県内のみならず京都や三重にまで轟いていた。

前述のように，嘉兵衛「石材売上帳」によると，蓮華寺燈籠は嘉兵衛作の燈籠の中で最も人気のある型で，その多くが湖東地域に販売されていた¹²⁾。

(3) 嘉兵衛蓮華寺燈籠と他地域の蓮華寺燈籠の比較

嘉兵衛蓮華寺燈籠と他地域蓮華寺燈籠の比較を各部位の形態を基に行った。対象とした燈籠の詳細（サンプルの分類，各部位の特徴および設置場所）は表－4 に示す嘉兵衛蓮華寺燈籠（K1－K21）および，他地域の蓮華寺燈籠（O1－O25）とした。サンプル数は，嘉兵衛蓮華寺燈籠 $N_1=21$ と他地域蓮華寺燈籠 $N_2=25$ である。また，図－4 に嘉兵衛蓮華寺燈籠の実測調査と他地区の蓮華寺燈籠の目視を基に抽出された各部位の形態的特徴をまとめ，図－5 に嘉兵衛蓮華寺燈籠と他地域の蓮華寺燈籠の比較を示す。合わせて本歌との比較を示す。

1) 宝珠の比較

宝珠はまず大きく 3 つに分類できる。「A 型」は単一の球形で上部の先端に小さな突起がある。「B 型」は上部と下部があり，上部の先端に小さな突起がある球形であり，下部は六角または丸い台座が付いている。「C 型」は上部が先端に小さな突起がある球形で，下部の台座に変化形の複弁（伏せ蓮華紋）が彫られている形である。本歌は「B 型」に分類できる。集計結果から，嘉兵衛蓮華寺燈籠の宝珠は「C 型」が 25/25（100%）であることが分かった。一方，他地域においては「B 型」19/25（76%）と「A 型」6/25（24%）であり，「C 型」は嘉兵衛蓮華寺燈籠のみが有する形態の特徴であるといえる。本歌はもともと円錐形であったとの記録があるが具体的な形状はわからない。

2) 笠の比較

次に，笠は本歌と同じく九重のものとそれ以外に分類される。嘉兵衛蓮華寺燈籠の笠は全てが九重であるのに対し，他地域では九重が 5/25（20%）であり，五重，六重，七重や八重など異なるものが用いられていた。また笠の形状については，本歌が大きい番傘のような直線的な形状に対し，嘉兵衛蓮華寺燈籠は上部に起りと下部に照りがある波型となっており全てがほぼ同型であった。一方，他地域の蓮華寺燈籠は，嘉兵衛蓮華寺燈籠と同じく波型または比較的直線的な照りが施されているものが各 4 割と多

いが、照りまたは起りが強調されたものもあり、地域によって特徴が異なることが分かった。

さらに、笠の裏面は垂木があるものと無いものとに分けられる。本歌および他地域の蓮華寺燈籠には笠下に垂木が施されている場合が多く 19/25 (76%) であるのに対し、嘉兵衛蓮華寺燈籠の笠下には垂木は施されていない。これは四角い垂木が並ぶと笠の曲線とのバランスが難しくなるため、笠の先端部分の緩やかな曲線や下部の火袋への連続性を重視したためではないかと推察される。

3) 火袋の比較

火袋はいずれも六角形だが 3 種類に分類することができる。火口の 2 ヶ所のみが開いていて柱が真直ぐな「直 A 型」、六方向に開かれて（六方ぬき）閉じた面が無くかつ柱が真直ぐな「直 B 型」、そして同じく六方ぬきであり柱に弧形の起りがあるものを「起り」とした。本歌は「直 A 型」に分類される。嘉兵衛蓮華寺燈籠は「起り」が 25/25 (100%) であった。一方で他地域の蓮華寺燈籠では、「直 A 型」が 18/25 (72%)、「直 B 型」が 7/25 (28%) であり、「起り」は無かった。地元の石材業者への聞き取り調査から、六方ぬきは技術的にも難しく、さらに火袋の柱に起りを付けるのは西江州の特徴であるとされており、蓮華寺燈籠においてもその特徴が生かされていることが分かる。

4) 中台の比較

中台は「飾りあり」と「飾りなし」に分けられ、さらに中台の下部に蓮弁の「単弁」または「複弁」を施したものと「蓮弁なし」および風化または写真では形状を判断できないものは「不明」に分類した。本歌の中台に飾りはなく、中台の下部には「単弁」が施されている。嘉兵衛蓮華寺燈籠の中台の六角型の隅には蓮の形を模したような隅飾が全てのサンプルに施されているが、他地域にこの飾りはなく、西江州の創作意匠である可能性が高い。また、中台の蓮弁も他地域では単弁が 20/25 (80%) または蓮弁がないもの 4/25 (16%) が多いが、嘉兵衛蓮華寺燈籠の場合は全てに複弁があり、これも嘉兵衛蓮華寺燈籠の特徴であるといえる。

5) 竿の比較

竿は 5 種類に分類でき、それぞれ中央に節がある「A 型」、中央に四角い孔付きの「B 型」、正面（あるいは正面と裏面）に浅い四角形の彫りがある「C 型」、左右に貫がある「D 型」とした。竿「C 型」は正面に彫りがある。本歌は先述のとおり、現在は節付きの「A 型」であるが、かつては四角孔があけてある「B 型」であったと記録されている。嘉兵衛蓮華寺燈籠の竿は「D 型」25/25 (100%) である。他地域では、A、B、C 型がそれぞれ 6/25 (24%)、6/25 (24%)、13/25 (52%) であり、竿の正面（あるいは正面と裏面）に浅い四角形を彫った C 型が多く確認され貫が施されているものはなかった。また、嘉兵衛蓮華寺燈籠の貫は正面ではなく左右にあるのが、後述する西村嘉兵衛の当主が保管していた絵図に確認することができる。またこの貫には上部に楔（くさび）も施されている。貫や楔を竿に施すためにはより大きな石材を使用する必要があるが、貫がある事により真直ぐな竿に変化を出すことが出来る。このように全体のバランスを考慮したデザインを有する「D 型」は、西村嘉兵衛の独自のデザイン様式であると考えられる。また、嘉兵衛と同時期に活躍した中野甚八作の現存する数少ない蓮華寺燈籠（R3）もほぼ同じデザインを用いており、当時の西江州蓮華寺燈籠の独自のデザイン様式にもなっていた可能性が高い。西江州蓮華寺に採用されている六方ぬきの火口により、庭園に設置する際や形状が発展する段階において四角い彫りの方向性が徐々に左右にバランスを取ったデザインになり、さらに技術の高さを示すものとして、四角い彫りではなく貫を配する形へと進化していったとも推察できる。

6) 礎盤の比較

嘉兵衛蓮華寺燈籠の全てに礎盤があるのに対して、本歌および他地域蓮華寺燈籠に礎盤があるものはない。他地域の蓮華寺燈籠には竿と基礎の接合部分に蓮弁が彫られているものが多く（岡崎産以外全て）、嘉兵衛蓮華寺燈籠はこれが独立した構成要素に変化したのではないかと推察できる。これにより、本歌および他地域の蓮華寺燈籠の構成部分が 6 部位であるのに対し、嘉兵衛蓮華寺燈籠は 7 部位となり独自の形態を有している。丸い礎盤は釣鐘堂を受ける丸い柱の基礎部分などに使われており、蓮華寺燈籠の丸い竿を受けることからヒントを得たと想像されるが実際の所は分からない。

7) 基礎の比較

嘉兵衛蓮華寺燈籠には基礎に文様があるものが多く（基礎が埋まって確認できないもの以外全て）、一つの部位を構成しているのに対し、他地域の蓮華寺燈籠は基礎部分に直接または六角の上に蓮弁の彫りが施されているものが多い。また本歌および他地域の蓮華寺燈籠では、基礎の大部分は土に埋める形態を取っており確認できないものが多い。

（4）嘉兵衛蓮華寺燈籠の特徴

嘉兵衛蓮華寺燈籠と他地域蓮華寺燈籠の比較から、特に嘉兵衛蓮華寺燈籠は燈籠を構成する部位が 7 部位あること、また各部位の詳細を確認したところ、宝珠の形、笠の垂木が無い、火袋の起り、中台の装飾、中台の蓮弁の複弁、竿の貫、礎盤、基礎の形態と文様などすべてにおいて嘉兵衛蓮華寺燈籠独自の形態的特徴が確認できた。K1-K21（K 群）の嘉兵衛蓮華寺燈籠は全ての部位において形態的特徴がほぼ同一であるが、その径や高さに差異が見いだせることから、表 5 に K 群の結果を示す。K3 の各部位の径を 100% とした場合、K 群の中にはその大きさが 96% ~ 120% のバリエーションがあった。特に宝珠で 120% や笠で 108% など大きなものが確認できる。また、高さでは 79% ~ 125% のバリエーションが確認できるが、宝珠が折れていたり、基礎の一部が地中に埋まっていたりする場合もあり、正確な高さを測れないものも含まれている。

また、他地域の蓮華寺燈籠に比べ、細部の装飾や石材をより多く必要とする竿の貫などを用いるなど意匠を凝らすことで、他地域との差別化を図り、装飾性および独自性が高い蓮華寺燈籠を製作していたことが分かった。また、曲線の強い重い笠を六方ぬきの細い柱で支える火袋を用い、さらに長く伸びる竿を合わせることで、曲線と直線のバランスを考慮している点も嘉兵衛蓮華寺燈籠の大きな特徴であるといえる。なぜならこれらの繊細な加工は西村嘉兵衛の山から採石された細粒の花崗岩²¹⁾を用いることで可能となるからである。これらの形態的特徴を有した嘉兵衛蓮華寺燈籠の定型がある程度存在していた可能性がある。この背景には、西江州燈籠の名を世に広めた西村嘉兵衛の技術と石材の特徴がこれらの形態的特徴を生み出していた可能性が高いことが推察される。一方で、西村嘉兵衛作以外の西江州蓮華寺燈籠は、火袋部分が同時期に活躍した中野甚八作以外は起りではない、宝珠の形態が異なる、竿の貫部分の彫りが嘉兵衛蓮華寺燈籠に比べて浅いなどの異なる特徴を有しており、定型が出来上がる前のものであることが推察される。

4. 西江州蓮華寺燈籠の形態変化

（1）概要

ここまでは嘉兵衛蓮華寺燈籠と他地域の蓮華寺燈籠の違いを分析することにより、嘉兵衛蓮華寺燈籠の形態的特徴を有していることを示したが、それらがどのような段階を経て現在の典型的な形態に固定されていったのかを西江州蓮華寺燈籠と嘉兵衛蓮華寺燈籠を比較しながら考察を試みる。

検討に用いる蓮華寺燈籠は図 6 に立体図および写真で示す

表－４ 蓮華寺燈籠サンプルの分類、各部位の特徴および設置場所

番号	場所	産地石材	宝珠	笠・垂木	火袋	中台飾・蓮弁	竿	礎盤	基礎	設置場所
K 1	愛知郡	西江州	C	九段・なし	起り	有・複弁	D	有	六角（埋め）	私庭・手水鉢
K 2	東近江	西江州	C	九段・なし	起り	有・複弁	D	有	六角・側面文様	販売元
K 3	東近江	西江州	C	九段・なし	起り	有・複弁	D	有	六角・側面文様	私庭・手水鉢
K 4	東近江	西江州	C	九段・なし	起り	有・複弁	D	有	六角・側面文様	販売元
K 5	東近江	西江州	C	九段・なし	起り	有・複弁	D	有	六角・側面文様	私庭
K 6	東近江	西江州	C	九段・なし	起り	有・複弁	D	有	六角・側面文様	私庭
K 7	東近江	西江州	C	九段・なし	起り	有・複弁	D	有	六角・側面文様	私庭
K 8	東近江	西江州	C	九段・なし	起り	有・複弁	D	有	六角・側面文様	私庭
K 9	東近江	西江州	C	九段・なし	起り	有・複弁	D	有	六角・側面文様	私庭・手水鉢
K 10	東近江	西江州	C	九段・なし	起り	有・複弁	D	有	六角・側面文様	私庭
K 11	東近江	西江州	C	九段・なし	起り	有・複弁	D	有	六角（埋め）	私庭・入口
K 12	東近江	西江州	C	九段・なし	起り	有・複弁	D	有	六角・側面文様	私庭
K 13	東近江	西江州	C	九段・なし	起り	有・複弁	D	有	六角・側面文様	私庭
K 14	東近江	西江州	C	九段・なし	起り	有・複弁	D	有	六角・側面文様	私庭・入口
K 15	東近江	西江州	C	九段・なし	起り	有・複弁	D	有	六角・側面文様	私庭
K 16	東近江	西江州	C	九段・なし	起り	有・複弁	D	有	六角（埋め）	私庭
K 17	東近江	西江州	C	九段・なし	起り	有・複弁	D	有	六角・側面文様	私庭・入口
K 18	彦根	西江州	C	九段・なし	起り	有・複弁	D	有	六角・側面文様	販売元
K 19	長浜	西江州	C	九段・なし	起り	有・複弁	D	有	六角・側面文様	私庭
K 20	大津	西江州	C	九段・なし	起り	有・複弁	D	有	六角・側面文様	私庭・入口
K 21	甲賀	西江州	C	九段・なし	起り	有・複弁	D	有	六角・側面文様	私庭・手水鉢
R 1	東近江	西江州	A	九段・なし	直B	有・複弁	E	有	六角・側面文様	私庭
R 2	東近江	西江州	B	九段・なし	直B	有・複弁	E	有	六角（埋め）	私庭・中庭
R 3	大津	西江州	C	九段・なし	起り	有・複弁	D	有	六角・側面文様	私庭
R 4	犬上郡	西江州	C	九段・なし	直B	有・複弁	E	有	六角・側面文様	私庭・手水鉢
O 1	京都	白川石	B	八段・有	直B	なし・単弁	C	なし	単弁反花・六角・側面無地	私庭
O 2	京都	不明	B	不明	直A	なし・単弁	B	なし	単弁反花・六角（埋め）	文化施設
O 3	京都	不明	B	六段・有	直A	なし・単弁	C	なし	単弁反花・自然石	私庭
O 4	京都	鞍馬石	B	九段・有	直B	なし・単弁	B	なし	単弁反花・六角・側面無地	販売元
O 5	京都	不明	B	七段・有	直B	なし・単弁	B	なし	単弁反花・六角・側面無地	販売元
O 6	京都	鞍馬石	B	八段・有	直B	なし・単弁	B	なし	単弁反花・六角・自然石	販売元
O 7	長浜	不明	B	六段・有	直A	なし・単弁	C	なし	単弁反花・自然石（埋め）	私庭
O 8	東近江	不明	B	九段・有	直B	なし・単弁	B	なし	単弁反花・六角・側面文様	私庭
O 9	近江八幡	不明	B	九段・有	直B	なし・単弁	B	なし	単弁反花・六角（埋め）	販売元
O 10	栗東	輸入材	B	八段・有	直A	なし・単弁	A	なし	不明	販売元
O 11	湖東	不明	B	五段・有	直A	なし・単弁	C	なし	単弁反花・自然石（埋め）	私庭
O 12	大阪	岡崎石	B	六段・有	直A	なし・単弁	C	なし	単弁反花・自然石	販売元
O 13	名古屋	不明	B	七段・有	直A	なし・単弁	C	なし	単弁反花（埋め）	文化施設
O 14	岩倉地域	不明	B	八段・有	直A	なし・単弁	A	なし	単弁反花・六角（埋め）	私庭
O 15	岡崎	不明	A	八段・なし	直A	なし・なし	C	なし	六角・側面無地	販売元
O 16	岡崎	不明	A	八段・なし	直A	なし・なし	C	なし	六角・側面無地	販売元
O 17	岡崎	讃院石	A	八段・なし	直A	なし・不明	C	なし	六角・側面無地	販売元
O 18	岡崎	不明	A	八段・なし	直A	なし・なし	C	なし	六角・側面無地	販売元
O 19	岡崎	不明	A	八段・なし	直A	なし・なし	C	なし	六角・側面無地	販売元
O 20	岡崎	岡崎石	B	九段・有	直A	なし・単弁	A	なし	単弁反花・六角・側面無地	販売元
O 21	金澤	滝ヶ原石	B	七段・有	直B	なし・単弁	A	なし	単弁反花（埋め）	文化施設
O 22	白山	岡崎石	A	七段・有	直A	なし・単弁	C	なし	単弁反花・自然石（埋め）	文化施設
O 23	東京	不明	B	九段・有	直A	なし・単弁	A	なし	単弁反花・六角・側面無地	文化施設
O 24	高松	不明	B	八段・有	直A	なし・単弁	A	なし	単弁反花・六角・側面文様	販売元
O 25	桜川	不明	B	八段・有	直A	なし・単弁	C	なし	単弁反花・自然石	販売元

図-4 各部位と形態の種類

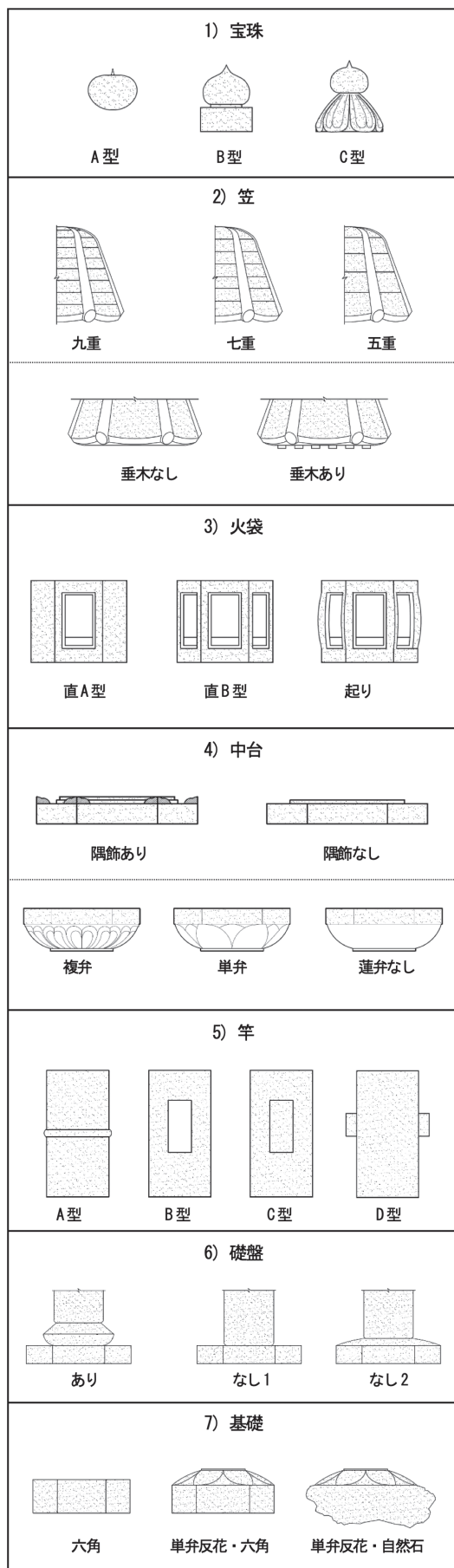
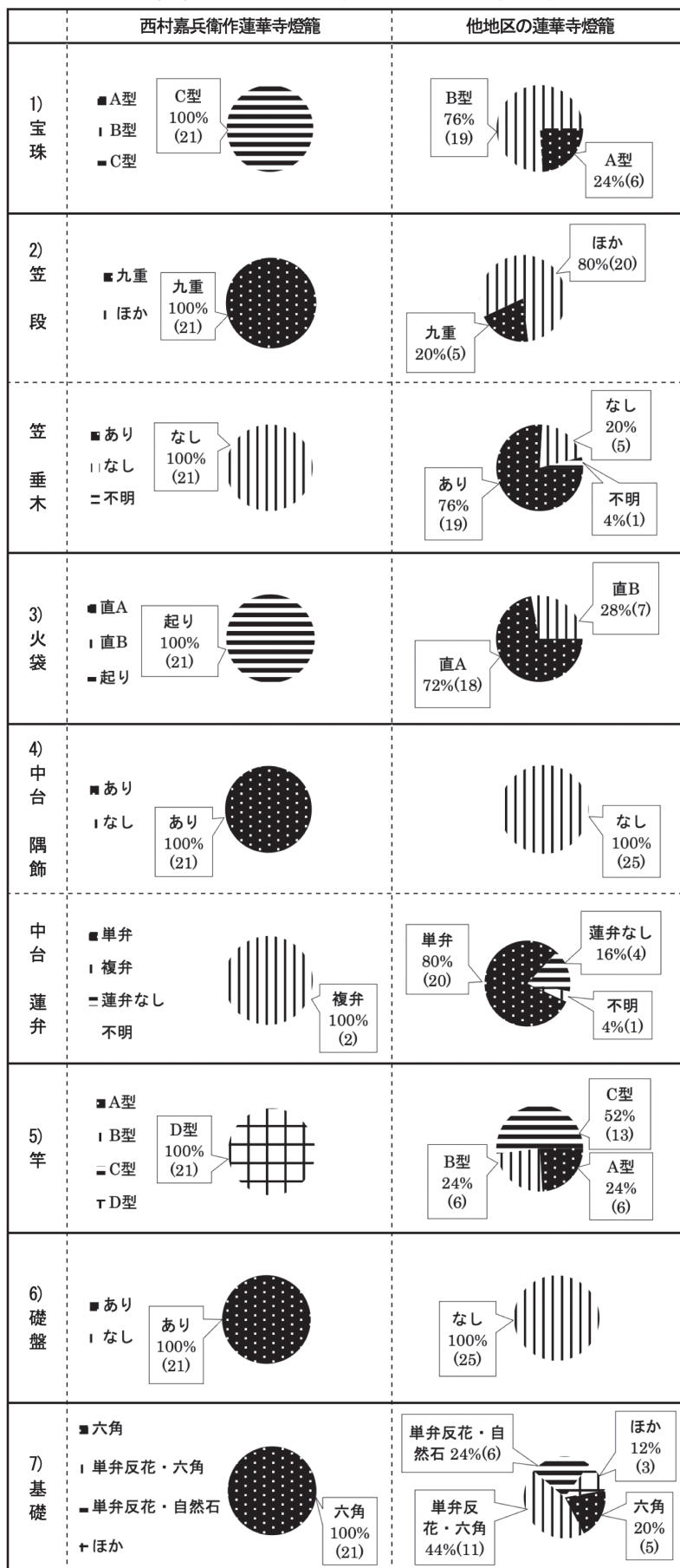


図-5 各部位による西村嘉兵衛作と他地区の蓮華寺燈籠の比較



表－5 嘉兵衛蓮華寺燈籠の各部位の径と高さ比較

K3	宝珠	笠	火袋	中台	竿	礎盤	基礎
径	100～	100～	100～	96～	98～	97～	96～
K 群	120%	108%	103%	104%	105%	107%	102%
高さ	*79～	98～	96～	84～	95～	92～	**79～
K 群	109%	102%	104%	99%	101%	125%	116%

K3 の各部の径および高さを 100% とする。

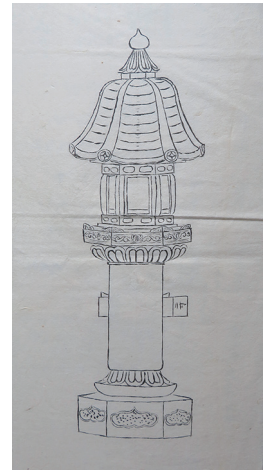
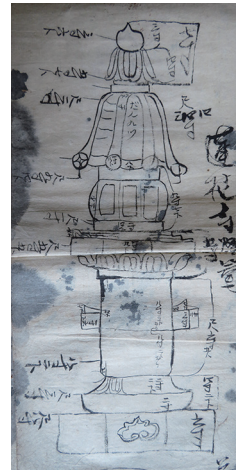
*宝珠の先端が割れていることが多く正確な高さではない。

**基礎は程度の差こそあれ一部が地中に埋められている。

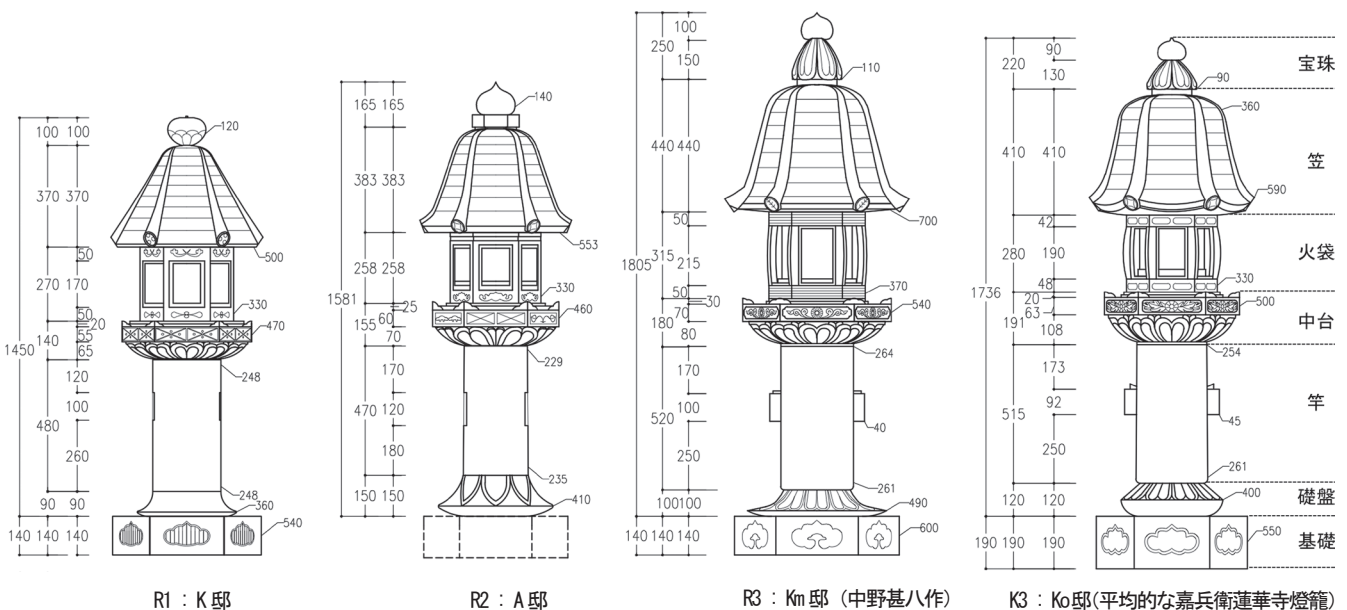
表－6 蓮華寺燈籠の各部位の径と高さ

各部	径				高さ			
	R1	R2	R3	K3	R1	R2	R3	K3
宝珠	24%	25%	16%	15%	20%	30%	36%	37%
笠	100%	100%	100%	100%	74%	69%	63%	69%
火袋	66%	60%	53%	56%	54%	47%	45%	47%
中台	94%	83%	77%	85%	28%	28%	26%	32%
竿	50%	42%	37%	44%	96%	85%	74%	87%
礎盤	72%	74%	70%	68%	18%	27%	14%	20%
基礎	108%	-	86%	93%	28%	-	20%	32%

*笠の径を 100% とする。



明治 12 年 2 代目西村嘉兵衛作と昭和 5 年 2 代目西村嘉兵衛の四男作
図－7 西村嘉兵衛とその家族の絵図台帳に描かれた蓮華寺燈籠



図－6 異なる時代の西江州蓮華寺燈籠の詳細図面と写真

製作年代が古いと考えられる R1 (K 邸) と R2 (A 邸)、嘉兵衛と同時代に活躍した中野甚八作の蓮華寺燈籠 R3 (Km 邸) および嘉兵衛蓮華寺燈籠 K 群の中から典型的な近江商人の庭に設置されている K3 (Ko 邸) を選定した。それぞれの燈籠の各部位の径と高さを比較した結果が表-5 である。K 群の嘉兵衛蓮華寺燈籠は、形態的特徴がほぼ同一であるが、その径や高さに差異が見いだせることから、表-5 では K 群の結果を示す。R1 の屋敷は 1860 年頃に建てられ、その後何度か増築されている²⁴⁾。所有者への聞き取り調査 (2021 年) によると、R1 は明治時代に家屋増築を行う以前からすでに存在していた最古のものの一つであり、江戸時代から明治初期の作であると推察できる。R2 の屋敷と中庭は明治 16 年 (1883) に建てられたと伝えられ²⁵⁾、その後一部の家屋は増改築を行っているが、蓮華寺燈籠が設置されている中庭部分周辺に関しては増改築を行っておらず、建設当時の状態を保っており、その配置からも明治時代の作であると考えられる。K3 は、大正元年から昭和 35 年 (1912 - 1960) までの嘉兵衛の石材売上帳をもとに行った調査で見つかった嘉兵衛蓮華寺燈籠の代表的な一本である。嘉兵衛の石材売上帳に記載があり、所在を確認できた蓮華寺燈籠には糠目 (細粒) の赤石が用いられ、全てのサンプルで大きさは六尺、各部位の比率もおおむね同じような値であることが分かっている¹³⁾。表-4 は R1, R2, K 群の蓮華寺燈籠の各部位の比較をまとめたものである。K 群には 21 サンプルの値を示す。

R1, R2, K3 については、いずれも六角の竿立燈籠で、宝珠、笠、火袋、中台、竿、礎盤、基礎の 7 つの部位によって構成されている。K3 と同じく、R1 と R2 も嘉兵衛が持つ薄茶色がかかった細粒花崗岩で独特の質感を有しており、地元の石材業 A 氏への聞き取り (2021 年) によると西江州の石材さらには嘉兵衛の山の石を用いて製作されている可能性が高いという。R1, R2, K3 の実測詳細図面と実物の写真を図-6 に示す。

母屋の建築および作庭時期、燈籠の表面の状態 (風化具合) や彫刻された文様の風化 (欠けや丸み) の度合いおよび以下に示す燈籠の宝珠の形態、笠の先端部や中台周りの図柄に反映される時代的な特徴から、製作年代は R1, R2, R3/K3 の順になっていたと考えられる。次にそれぞれの形態的特徴、寸法と比率、彫られている文様を比較し考察する。

(2) 形態的特徴

R1, R2, R3 および K3 を比較した際に目を引くのは笠の形態の違いである。本歌は長く緩い起りがある形状であるのに対し、R1 の笠は比較的短い直線形である。一方、R2, R3 と K3 は上部に起り、下部に照りがある波型をしているが、R3 と K3 の方が上部の起りがより強調された形状をしていることが分かる。いずれも九重の瓦葺き様であるが、R1 と R3 が薄い彫りなのに対し、R2 さらには K3 になるにつれ彫りが強く各瓦が立体的になっている。これは加工技術や道具が進化したことでより特徴的なデザインや加工が可能となったことが考えられる一方で、R3 と K3 が同年代に活躍した石工であることを考慮すると、各石工の嗜好やデザイン性が反映されているともいえる。

また火袋においては、いずれも六角形だがどれも六方向に開かれており、R1 と R2 は同じく六面に開かれているが柱が真直ぐであるのに対し、R3 と K3 の柱には起りが施されている。これまでの他の種類の燈籠調査¹³⁾ でも古い年代の燈籠は火袋が真直ぐで起りが見られないことから、R3 と K3 が最も新しい形と考えられる。柱の起りは西江州蓮華寺燈籠の特徴として固定され現在に至っている。

竿も R1 と R2 は同じく浅い四角形の彫りがあるのに対し、R3 と K3 は左右に貫がある。本歌をはじめとして他地域でもほとんどが四角形の彫りが一般的で、この貫は嘉兵衛蓮華寺燈籠お

よび西江州蓮華寺燈籠の特徴の一つとなっている。竿に続く礎盤は 3 章で述べたとおり西江州蓮華寺燈籠の特徴のひとつであるといえるが、R1 は無地、R2 は単弁、R3 と K3 は複弁に変わり立体的になるとともに、より手間をかけた加工に変化しており、時代の特徴および変化を見て取れる。

さらに 5 点目の大きな違いとしては、宝珠の形態が挙げられる。R1 の宝珠は先端が小さく丸みを帯びた逆円錐形が一つでそこに蓮華文が彫られ台座がないのに対し、R2 は本歌と似た上部の球体と下部の六角の台座の二つの部分からなる。そして R3 や K3 になると、宝珠の上部が球体であるが小さくなり下部の台座に少し立体的な複弁蓮文が彫られている。R1, R2, R3 と K3 の宝珠を比較すると、宝珠の上部が小さくなり、台座は平台から変形形の複弁蓮座へと徐々に変化しており、嘉兵衛作代表的な K 群の固定様式となる。西村嘉兵衛およびその孫の家に残されていた絵図台帳には、嘉兵衛の代表的な蓮華寺燈籠が描かれており、明治 12 年 (1879) には既に形態が確立されていたことが推察できる。R3 は K3 と基本的には同じ形態であるが、K3 に比べて台座がより大きくつられている点が特徴的である。図-7 は明治 12 年 (1879) 2 代目西村嘉兵衛作と昭和 5 年 (1930) 2 代目西村嘉兵衛の四男 (捨吉) 作の絵図台帳にある蓮華寺燈籠である。

最後に 6 点目として注目したいのが礎盤である。図-5 でも示した通り他地域の蓮華寺燈籠には礎盤は無く、西江州蓮華寺燈籠の特徴であると言えるが、R1, R2, R3 の礎盤は共に下部の上方向への反りが確認できるのに対し、K3 は下部を大きく取り丸みを帯びた形態となっている。また、R1 は無地、R2 は単弁、R3 と K3 は複弁と加工がこちらでも時代を経るにつれて装飾的に変化していることが確認できる。

(3) 寸法と比率

次に寸法と比率の観点から 4 本の蓮華寺燈籠を比較する。図-6 に示すように、破損や誤差を含めて、R1 と R2 は五尺として製作されたと考えられる。一方、R3 と K3 六尺として製作された²⁴⁾。表-6 は各部の比率を示したもので、笠の径を 100% に設定した場合 5)、R1 と R2 では、宝珠、火袋、礎盤がそれぞれ 20%、60%、70% 以上の高い比率になっているのに対し、R3 と K3 では、それぞれ 15%、16%、53%/56%、70%/68% であった。一方、宝珠の高さは R1 から R3/K3 にかけて増加傾向を示している。そして笠と竿の高さが、燈籠に占める割合が R1 から R3/K3 にかけて減少している。つまり、蓮華寺燈籠の形態が変化する過程で、宝珠、火袋、礎盤の直径比率が小さくなり、竿の高さの比率も小さくなったが、宝珠の高さの比率は大きくなったようである。さらに、平山は庭の燈籠に関する研究の中で、蓮華寺燈籠の燈頭 (宝珠、竿、火袋、中台) と燈身 (竿、基礎) の比率は 63 : 37 であることを示したが⁸⁾、西江州蓮華寺燈籠では R1 が 55 : 45、嘉兵衛蓮華寺燈籠の K3 が 52 : 43 であり、燈身の割合が大きいことが分かった (R2 と R3 は基礎部分が埋まっているため推定不能)。このことから西江州あるいは嘉兵衛蓮華寺燈籠は本歌に比べ燈頭がやや小さく燈身が大きくなり、嘉兵衛蓮華寺燈籠ではより縦に長い印象を有している。

(4) 文様

R1, R2, R3 と K3 に共通する特徴が中台の複弁である。先に述べたように他地域は単弁であることから西江州蓮華寺燈籠はより装飾性を高くしていることが伺える。ただし R2 の蓮弁の細部に多少の違いがある。一方、火袋と中台に彫刻された文様は R1, R2 と R3/K3 の燈籠ともそれぞれ大きく異なっている。R1 の火袋と中台の六面はそれぞれ単純化した唐草文様のような彫りが六面すべてに、R2 の火袋は上部が二重線で下部は唐草文様のような彫りが全面に施されているのに対し、R3/K3 は長楕

円形といった単純な文様が彫られている。また、R1の中台は全て同じ文様、R2は六面それぞれに異なる文様であるのに対し、R3/K3の中台は六面全てで少しずつ違いのある菊（あるいは牡丹）であり、その彫りもK3ではより立体的になっている。これらのことから、嘉兵衛蓮華寺燈籠が確立される段階でより装飾性が高い彫りが施されるように変化していることが読み取れる。

また、R1、R3とK3の基礎には格狭間の文様があり（R2は基礎部分が埋まっているため推定不能）、他地域の蓮華寺燈籠では基礎部分に文様を彫っていないものが多く、西江州および嘉兵衛燈籠では春日燈籠などの大型の燈籠と同じく基礎にも文様を入れ、細部にわたって装飾を行っていることが分かる。

（5）変化の特徴

4本の蓮華寺燈籠には共通点があり、いずれも嘉兵衛の赤目の細粒花崗岩を使い、7つの部位によって構成されていた。一方で、宝珠、笠、火袋、竿、礎盤の形、大きさと構成部分の比率に違いがあり、さらには文様も燈籠により異なっていた。全体として、これらの蓮華寺燈籠から、1) 直線型から起りを有する曲線型への変化（笠や火袋の形状など）と、2) 単純から複雑への変化（宝珠や中台の飾りや彫り、または礎盤の文様など）が形態的变化の特徴として挙げられる。これはR1の単純で直線的な形態からR2さらにはR3/K3の複雑で曲線を用いた形態へと時代を経て変化していった過程をみる事が出来る。

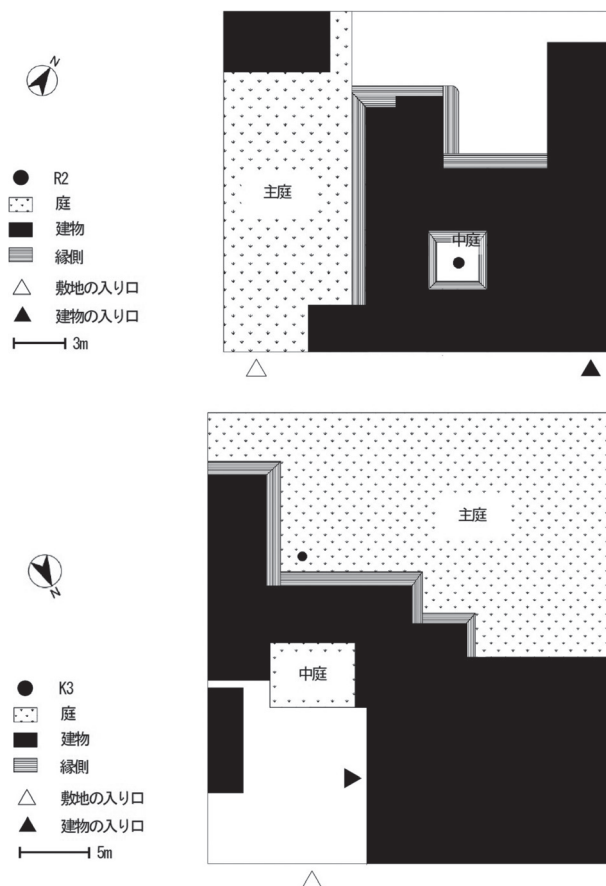
5. 蓮華寺燈籠の設置場所

（1）燈籠の位置

燈籠の種類によっては設置される位置があらかじめある程度決められているものがある。燈籠を庭のどこに据えるかについては、上原によると「照明が本来の目的であるので、たとえ照明用でなく、景到本位としても照明の目的にかなっている位置が結局風致から見てもよくあるべきではずである」⁴⁾とし、燈籠の位置の決め方には、1) 照明の適所、2) 全形をみせるところ、3) 燈影を楽しくみせるところ、4) 木隠れに見せる所が関係していると述べている⁴⁾。本節では、西江州の蓮華寺燈籠の位置について着目した。

（2）西江州蓮華寺燈籠の位置

嘉兵衛蓮華寺燈籠21本と西江州蓮華寺燈籠4本の合計25本のうち、販売元にある3本を除いたサンプル22本の設置を確認したところ、ほとんどが座敷から見える位置に設置されており（20/22本）、また半数が縁側の近くに置かれ（13/22本）、庭の入口や玄関先に設置されていた（4/22本）。そして縁側の近くに置かれていた13本中4本が水鉢の横に配されていた。これらの設置については、当初蓮華寺燈籠が納品された際に置かれた位置から移動した可能性や購入時に所有者の好みに合わせて設置場所を決定した可能性があることから確定は出来ないが、蓮華寺燈籠は照明の役割と近景にて特徴的な形状や燈籠に施された細かな彫刻を見せるという役割を果たしていると考えられる。これは蓮華寺燈籠の特徴として挙げられるもので、作庭の際に庭の中心部分に設置される春日燈籠や池の傍に置かれる雪見燈籠³⁾のように、蓮華寺燈籠も設置する場所がある程度決まっていたことが読み取れる。また、異なる大きさが製作された春日燈籠や雪見燈籠に対して、座敷から平均2mの位置に設置されていることが多い蓮華寺燈籠はほとんどが六尺であり、この大きさは圧迫感無く照明という機能を果たしながら、近くからの観賞にも耐えうる配慮がなされていた可能性がある。縁側の近くに置かれていない場合の多くは、通路部分や庭先に置かれており、主に照明としての役割を担っていた。所有者への聞き取り調査（2021）によると、古美術商などを通じて蓮華寺燈籠を購入した場合には、造園業者や石材業者の慣習に捉われず庭の装飾として所有者の趣味に応じた



図－8 住宅平面図と燈籠の配置

設置がなされていた。

図－8はR2およびK3の設置を示している（R1は住宅を増築した際に移動させているため、対象としていない）。R2の蓮華寺燈籠は家の中心部に作られた縁側に囲まれた中庭に置かれ、照明と近景の役割を担っていたと考えられるが、参考文献やこれまでの調査でも部屋に囲まれた中庭に蓮華寺燈籠が設置されていた事例は無く大変珍しい。K3の位置は作庭において最も典型的な設置場所である縁側の近くで、水鉢の横に据えられている。これらの事例から、蓮華寺燈籠は主に照明と近景のため縁側近くに用いられていたが、かつてはこれのみならず、中庭などにも設置されていたことが歴史ある旧家に残されている事例から分かった。住居部分の近くに置かれ使用されるということで、蓮華寺燈籠は全体的にバランスの良く、また細部にわたって繊細な装飾を施すことで近くで眺めるに耐えられる作りになっていたともいえる。

6. 結論

本論では、蓮華寺燈籠に着目し、嘉兵衛蓮華寺燈籠と西江州燈籠を他地域の蓮華寺燈籠を比較分析することにより、嘉兵衛蓮華寺燈籠の特徴として、部位が7部位あるとともに、各部位に形態の特徴があることや、文様など細部の彫りや加工に意匠を凝らし装飾性および独自性が高いことを示した。また、嘉兵衛蓮華寺燈籠は各部位の直線と曲線の形、さらには全体のバランスを考慮して作られていることを明らかにした。また、これらの特徴には西江州の石工たちが作り上げた定型の影響だけでなく、名工・西村嘉兵衛の山から採石された細粒花崗岩¹⁶⁾を用いたことで可能となる加工であったことを述べた。

さらに、西江州蓮華寺燈籠および嘉兵衛蓮華寺燈籠の形態が固定されていった段階を4本の蓮華寺燈籠の比較を通じ考察した。

4本の蓮華寺燈籠はいずれも嘉兵衛の赤石を使い、7つの部位によって構成されていたが、宝珠、笠、火袋、竿、礎盤の形、大きさと構成部分の比率に違いがあり、さらには文様も燈籠により異なっていた。また、直線型から起りのある曲線型への変化と、単純から複雑への変化が確認できた。さらに燈籠の設置場所については、蓮華寺燈籠は主に照明と近景のため縁側近くに用いられていたが、かつては同じ役割を果たす中庭など現在の典型的な設置場所とは異なる位置にも置かれていた事例を示し、蓮華寺燈籠の繊細な装飾や全体のバランスという形態的特徴に影響していることを示した。

最後に、本研究では嘉兵衛作燈籠を体系的に理解することを目的とし、その第一段階として嘉兵衛蓮華寺燈籠を取り上げ、多くの嘉兵衛蓮華寺燈籠を収集し、赤目の細粒花崗岩という石質、火袋の起りや竿の貫といった各部位の形態的特徴を示した。また、西江州蓮華寺燈籠と嘉兵衛蓮華寺燈籠について、その形態や図柄の時代的変遷の可能性を整理し示すことで、嘉兵衛蓮華寺燈籠が有する特徴と西村嘉兵衛の加工技術を示した。一方で、西村嘉兵衛の代表作である奥之院燈籠や水鉢についてもさらなる解明が求められる。これらの研究により、西村嘉兵衛のように江戸時代から明治・大正期に活躍した名工たちが手掛けた燈籠という名作の価値が広く認識・再評価され、旧家の家屋や庭の取り壊しが進む現在において、後世に正しく残されるきっかけとなることを願っている。

謝辞：調査にご協力頂いた平出石材工業の平出直厚氏、湖東地域および京都市の石材業・造園業・関係者の皆様に感謝の意を示します。本研究は、人間文化研究機構総合地球環境学研究所のプロジェクト番号14200103の一環として行った。

補注及び引用文献

- 1) 天沼俊一（1933）：石燈籠：スズカケ出版部昭，2-132
- 2) 福地謙四郎（1985）：日本の石燈籠：理工学社，89-302
- 3) 川勝政太郎（1984）：燈籠・手水鉢：誠文堂新光社，1-147
- 4) 上原敬二（1985）：石灯籠・層塔：加島書店，1-75
- 5) 塚本嘉一（1972）：日本の美石製品のみちしるべ：岡崎石製品工業団地協同組合，6-72
- 6) 塚本嘉一（1980）：図典 石塔と石灯籠：鎌倉新書，44-75
- 7) 西村金造・大橋治三（1991）：西村金造作品集：毎日新聞社，146-189
- 8) 平山勝蔵（1960）：庭灯籠の形態的特異性について：造園雑誌24(2)，31-36
- 9) 平山勝蔵（1961）：春日燈籠および類形燈籠の形態的特徴について：造園雑誌25(3)，28-32
- 10) 平山勝蔵（1960）：織部灯籠・有明灯籠の形態的特徴について：造園雑誌24(4)，96-100
- 11) 龍居庭園研究所（1992）：石燈籠の話：建築資料研究社，24-25

- 12) 「石材売上帳」の詳細については、落合知帆（2021）：資料から読み解く滋賀県の名工・西村嘉兵衛の石燈籠に関する研究：ランドスケープ研究85(5)，393-398を参照。また、本研究にて、蓮華寺燈籠が最も多く製作・販売されていたことが明らかになっている。
- 13) 楊書偉・落合知帆・深町加津枝（2021）：近江石工・西村嘉兵衛の蓮華寺燈籠と奥の院燈籠の形態的特徴と技術：ランドスケープ研究85(5)，381-386
- 14) 「石材売上帳」は西村嘉兵衛の当代が保管していたものが一旦他者に渡ったが2022年に滋賀県立琵琶湖博物館に寄贈された。
- 15) A氏は大津市南小松出身。大阪府立大学農学部園芸農学科造園学教室卒、当地唯一の現役石材業者。滋賀県石材組合連合会会長（現顧問）や石材施行技能士の首席審査員などを歴任し、石材および石材加工に精通している。また、父親は卓越した技能者（現代の名工）として表彰されている。
- 16) 平出直厚（2021）：近江の灯籠（その1）：しゅうけい 滋賀 No.83 会報 社団法人滋賀県造園協会，11-12 参照。中野甚八は南小松地区出身の石工で、彼の名が刻まれた大型の狛犬が地元の八幡神社に奉納されている。地元の石工たちの間では、狛犬の精巧な作りからその高い技術が評価されているものの、燈籠に名前が刻まれることが少ないこと、また一代限りで後継ぎがいなかったことなどから、彼が製作にかかわったとされる燈籠は地区内に残る一部しか把握されていない。
- 17) 本論文では蓮華寺燈籠を研究対象としているが、これらの燈籠は屋外で雨風に晒され一部は風化が激しいものもあるため、すべてを正確に判定、記録および実測することは難しい。また、一般には燈籠の製作や搬入記録が殆ど残されておらず、製作年代の特定は資料があるものに限られる。また住宅や庭の解体によって燈籠が転売されている場合も多くあるため製作年代や製作地を特定するのが困難な場合がある。
- 18) 他地域の蓮華寺燈籠データの収集および分析に対しては、オンラインで収集したものをを用い実測調査を行っていないため、特に大きさに関する情報は比較対象外とした。
- 19) 西江州蓮華寺燈籠は、現在の滋賀県大津市（旧志賀町）の地区で産出された花崗岩を用い、その地域で制作された燈籠を示す。また、他地域蓮華寺燈籠は、西江州蓮華寺以外の国内の他地域で制作された燈籠を示す。
- 20) 瀬川欣一（2001）：近江石の文化財：サンライズ出版，273-275
- 21) 当地では、細粒の花崗岩は西村嘉兵衛の山からのみ産出されることが知られている。石材業A氏およびかつて石材業に携わっていた高齢者への聞き取りによって確認した。また、現地調査で嘉兵衛の採石地から石材を採取し、地質専門家に確認を行った。
- 22) 京都新聞（発行年不明）：近江職の風土記45
- 23) 近藤三雄・山村文志郎・山村眞司（2019）：秘伝・鈍穴流「花文」の庭：誠文堂新光社，162-323
- 24) 奈良国立文化財研究所（1994）：滋賀県の近代和風建築：滋賀県近代和風建築総合調査報告書：滋賀県教育委員会事務局，235-240（2022.11.30 受付，2024.3.27 受理）